

私が、外国人観光客向けに英語で茶道を教える仕事を始めた頃、まだ「インバウンド」という言葉さえ知らないまま、活動をスタートしていました。

「インバウンド」という言葉を知ったのは、2015年9月に観光客の方が気軽に来ていただける、茶道体験「古都」を金閣寺付近にオープンしてからのことでした。

今思えば、「経営」や、「集客の方法」もなにも知らないままのスタートでした。

日本人の旅行者の方だけでなく、外国人の方にも、「できるだけ正確に、楽しく、日本の茶道の心を伝えたい」「今ある外国人向けの文化体験施設にはないサービスを、私が提供したい」という強い思いだけが、私を動かしていました。

本当に、私にあったのは「想い」だけでした。

茶道体験「古都」のオープン当初は、年齢28歳。しかも、小さい頃から茶道の修業をしてきたわけではなく、大学卒業後に茶道・華道・着付けの教室に通い始めたので、講師の免許取りたてでした。

一生が修業であり、年齢や経験がものをいう、茶道などの伝統文化の世界においては、そんな若手講師は、まだまだ半人前と考えられます。

もちろん、出身もごく普通の一般家庭で、代々続く茶道の家柄でもなく、なんの歴史的由緒もありません。

英語力も、特別にすばらしいわけでもなく、前職は英語や外国人とは無縁のOLを5年間もしていました。

まさに、実績・人脈・強みゼロの状態からのスタートだったのです。

このように、ゼロからのスタートだった私が、外国人観光客に英語で茶道を教える教室をオープンし、1年半で毎月150〜500名のお客様が来てくださるようになり、国内外のメディアにも取り上げただけのようになった大きな理由は、間違いなく、日本に「インバウンド」の波がきているからにほかなりません。

本書では、これからインバウンドに取り組みたいお教室の先生方、日本文化の価値を外国人観光客にも伝え、国際交流の担い手になりたいと思っていらっしゃる方に、少しでも参考にしていただけるよう、現場での経験をもとに執筆しております。

現在、茶道や華道などの伝統文化のお稽古事をする人は、20〜30年前に比べると、大幅に減っています。

す。もつと言えば、お稽古事だけでなく、伝統工芸の技術においても、受け継ぐ人が減っています。その要因の一つとして、未経験の日本人が感じがちな「ハードルの高さ」があると思います。

また、現在、伝統文化に関わっている方の中にも、本当は「先生」として活動したい気持ちがあるけれど、「私は、年齢的に未熟だから」「家柄が普通で、なんの基盤もないから」「先輩方には、とても追いつけないから」などの理由で、諦めている方も多いのではないかと思います。

実績・人脈・強みゼロからスタートした私の経験が、伝統文化のお稽古を始めることに対して「ハードルが高い」と思われている方の心のハードルを低くし、また、教える立場を目指しているけれど具体的な行動に移せていない方が、その第一歩を踏み出すきっかけになれば……と思っています。